

Shalom M. Fisch & Lewis Bernstein(2001) Formative research revealed :
Methodological and process issues in formative research. Shalom M. Fisch and Rosemarie T. Truglio(2001) "G" IS FOR GROWING Thirty Years of Research on Children and Sesame Street. LEA, NJ p39-p60

Jun Nakahara@National Institute of Multimedia Education
jun@nakahara-lab.net
http://www.nakahara-lab.net/

まえふり

初期セサミストリートの制作では、1時間テスト番組×5のテスト番組を制作し、それらは研究目的だけに使用され、230000ドルが投資された。その研究こそが、フォーマティブエバリュエーション(FE)、その歴史は40年。Cronbach(1963)が提唱、Scriven(1967)が名付けた。本章では、FEをおこなう際の方法論とプロセスの問題に焦点化する。

ところで、FEと基礎研究の違いは？

- ・ 目的の違い
 - ・ たとえば基礎研究は「学習者のメンタルプロセス」の「理解」
 - ・ FEは「学習者の見る番組」を「教育的に改善すること」
 - ・ 実用的な問題を扱う(番組関係者にとってオヤクダチ)
 - ・ だから結果はすぐにわかるべき
 - ・ でも、信頼性と一般性のあるデータであるべき
 - ・ 研究者でないヒトに対して適切な方法で提示されるべき
- ・ 上記のFEの研究志向性の違いは、1)方法論的問題と2)プロセスの問題を生む

方法論的問題

何をいつテストすりゃーいいの(リソース配分問題)

- ・ 番組はいくつものコーナからできているため、全部テストは無理。だったら、どこにリソースを割り振るか?.....たとえば

前にやった知見があるなら、その応用可能性をさぐる(Muppet)

積分可能な一般的なデータがとれてないと無理だ

研究者と番組制作者が合意できるようなモノを調べても意味がない

「それ言っても変わらんだろー」というものを調べても意味がないし

コストに見合わないものを調べても仕方がない

フィージビリティを勘案したリソース配分(経済的、政治的判断)

評価指標に「行動のデータ」をとるか、「言語によるデータ」をとるか?

- ・ 方法論的には、「行動の観察」か「インタビューによる言語データ収集」か?
状況と得たい結果による。ただし、両者にはそれぞれ強みがあるので、それを知って意志決定する、或いは、補完しあうことが重要

【行動データの強み】

- ・ コーディングしやすい
- ・ 内気な子ども、表現の貧弱さの影響を受けにくい
- ・ 番組を視聴しながら評価(リアルタイムで...)ができる
- ・ 「どのくらい魅了されているか」をはかるときによく使われる

【言語データの強み】

- ・ 何をどの程度「理解」できたのかを知ることができる
- ・ 研究者による「意味の確認」が行える
- ・ 「なぜ魅了されているか」をはかるときに使われる

データには「個人のデータ」をとるべきか、「集団のデータ」なのか?

【個人のデータの強み】

- ・その方が ecological external validity が高い(イエでの視聴は個人だから)
- ・他の子どもからの影響が少ない

【集団のデータ】

- ・子どもはその方が安心する
- ・実際問題、その方が話が早いしデータも集まる (Practical use)

プロセスの問題

- ・FE の存在意義は「どの程度番組を良くし、効果的にできたか」にある
研究者と番組制作者との関係をどのように築くか、研究と番組の関係をどのように規定するかが、非常に重要な問題となる
CTW モデルに言及
制作者と研究者がすべての段階で協力するモデル

ex.

【研究者の役割】

- ・制作者の懐疑「おいおい、ジョークを分析するってーのかい」
マリッジ (コンサルタントとしての研究者の否定)
番組とはマリッジの研究者と制作者のマリッジの所産
研究と制作の関係は、チームの努力とみなせる
共通目標化：子どもにとって「benefit」を与えること
研究者は子どもの声を代弁し伝える

【研究者ではない人に結果をどう提示するか】

- ・研究結果の「見せ方」の問題
 1. 簡潔に
忙しい人にわかりやすく、その関心に応じて結果を提示
 2. 専門用語と統計を避ける
 3. 制作者チームが何を知りたいのか、にこだわる
 4. データを作成過程に対する具体的な示唆に翻訳する
 5. 「オススメ」まで踏み込む

雑感と論点

評価は、1)誰が、2)何の目的で、3)何を対象にして、4) どのような方法で、5)誰のどんな活動に貢献するために、6)どのような表現や形式で、7)どのタイミングで、結果をだすかを考える必要がある。

しかし、このうち軽視されるのは5)と6)と7)である。それは、これらをすっ飛ばして結果をだしたとしても、FE としては成立しないかもしれないが、いわゆる放送教育研究としては成立してしまうからである。「タイミングと対象に応じた見せ方」を考察しなければならない。しかし、考えてみれば、そのことは何も FE だけに言えることではないなあ。

本稿を一読すればわかるように、「ステキな FE」を達成するということは、FE の方法論を一心不乱に身につけた研究者の有能さや熱意だけに支えられているのではない。そうではなく、FE は、様々な制約や思惑の中で、1)手持ちのリソースをうまく配分しつつ、2)FE に関与する人々との関係を調整しながら達成されるプロセスである。それは研究であるのと同時に、経済的で政治的な決定のプロセスである。よって、「ステキな FE」を達成するためには、リソース (人員、カネ、モノ、キカイ) と、関係を緩やかに規定する制度や組織的裏付けが必要である。あっ、このことも何も FE だけに言えることではないなあ。

結局、「教育をよくしよう」「ステキな学習をうみだそう」とするということは、そういうことなんだろうな。